

## ターナーの《アイサコスとヘスペリア》—『四季』の連想—

出羽尚（宇都宮大学）

本発表は、ジョゼフ・マロード・ウィリアム・ターナー（1775–1851）の版画集《研鑽の書》の一点《アイサコスとヘスペリア》の解釈を行うものである。作品は典拠であるオウィディウス『変身物語』の一節を描いたものであるが、同時に、18世紀イギリスのジェイムズ・トムソンによる詩集『四季』の一場面を念頭に置くことで、ターナーが作品に複数の連想を付したことを指摘する。

《研鑽の書》の各作品は合計で71点が出版され、ターナーが設定した六つのカテゴリー（牧歌的風景、叙事詩的〔あるいは高尚な〕牧歌的風景、海景、山岳風景、建築のある風景、歴史的風景）に分類される。この分類を踏まえ、個々の作品の主題を検討する可能性はあるが、先行研究は主に版画集全体を包括的に捉えるにとどまり、《アイサコスとヘスペリア》についても、主題の検討はされていない。

《アイサコスとヘスペリア》は1819年の出版で、《研鑽の書》全体の第66番、「歴史的風景」に分類される。主題は銘にある通り、『変身物語』の巻十一に基づく。河神グラニコスの娘アレクシロエを母に持つアイサコスが、河神ケブレンの娘ヘスペリアを手に入れようと森から森へと彼女を追いかけ、河の堤で髪を乾かすヘスペリアを見つけた場面である。

一方、アイサコスとヘスペリアの図像伝統では、上記の場面が続く悲劇的場面が選択されてきた。すなわち、アイサコスに見つかり逃げ出すヘスペリアが蛇に咬まれ、その毒によって命を落とす場面と、自らの行為を悔いたアイサコスが絶壁から海に身を投げる場面との二つが、一つの構図に描かれるというものである。

その意味で、ターナーは伝統的な場面選択を逸脱している。しかし、これは彼が当時良く知られた男女の物語を連想させる場面を選択することで、作品に複数の物語の連想を組み込んだ結果と理解できる。それは、ジェイムズ・トムソンの『四季』（1730年）にある、水浴するミュージドーラをデイモンが木々の陰から覗き見するという挿話である。この覗き見の場面は、『四季』の挿絵として18世紀後半以降頻繁に視覚化されるのみならず、ジョン・オウピによる絵画作品、あるいはロイヤル・アカデミーの展覧会では丸彫や浮彫によっても表現されたほか、ダンス劇としても上演され、ミュージドーラは女性裸像が連想させる典型となっていた。

これを踏まえてターナーの作品を見ると、半裸の女性を覗き見る男性を描く点が、デイモンとミュージドーラの図像を踏襲していることに気が付く。なかでも1788年出版の版画との共通点が指摘できる。ターナーは物語主題を扱う際に、ひとつの典拠に縛られず、その主題が連想させる複数のイメージを関連付けて表現したことが指摘されるが（ニコルソン、1990年）、《アイサコスとヘスペリア》においても、彼のそうした実践を確認することができる。